審査の結果の要旨

論文提出者　中村琢巳

本論文は、「木造住宅のライフサイクルに関する歴史的研究―近世史料にみる資源保全型の建築活動」と題されたもので、江戸時代を対象に、前近代においての建築行為が、家を建てる行為のみならず、その修繕、増改築、建替にわたり、体系化された仕組に組み込まれたものであったことを実証的に明らかにしたものである。

本論文は 4 章から構成され、資料編が付される。

第 1 章は、「幕領・飛騨国の建築活動にみる木材資源の管理」と題されたもので、高山神社文書「居宅土蔵他取建取繕一件」の内容の分析を中心としている。ここで採取された建築行為に関する語は「取建」「取繕」「根継」「仕添」「継上ケ」「切縮メ」「仕立替」「取崩」「建替」「引移」「囲置」などであり、これらを通して建築のたどる生涯の実態を明らかにした。これは、近世において広く普及していた建築の存在のありかた状態を明らかにするものと言える。

第 2 章は、「集落における新規家作・建替・取繕の頻度、ならびに更新の実態」と題されたもので、江戸近郊の五つの農村の普請願を素材にして、建築行為の実態を捉えようとしている。普請願でもっとも頻出するのは「取繕」であって、これが通常の建築行為の中心であったことがここでも明らかにされる。また、各種の事情で家の維持が不能になったりして、家の明け渡し、解体売却などが起きるが、建築そのものは「建置」「取崩」から「建替」「分散」などの行為で維持されていく実態を明らかにした。また、逆に建築の寿命が、現在とは大きく異なり、相当に長いものであったことも指摘される。

第 3 章は、「幕末・明治期の名主日記にみる農家におけるメインテナンス活動」と題されたもので、具体的には武蔵国多摩郡連光寺村の名主であった富澤家を対象としている。当家には幕末から明治にかけての 50 年間の日記が残されていて、それを詳細に分析することによって、

大規模な屋敷の維持活動の実態を明らかにすることができる。大きな特徴はメインテナンスが反復されること、年中行事的な活動が顕著に認められることである。。また、維持の具体的な担い手としては、大工を中心とする職人、多数の出入りの人々達との関連についても詳細に分析した。

第４章は、「幕領・飛騨国の建築活動にみる木材資源の管理」と題されたもので、近世史料に見られる「囲木」と「古木」を追跡することによって、木材資源の使用状況を分析した。修繕、焼失への対応など、断続的な建築行為に対する蓄材として「囲木」が定められ、安定供給の仕組みを作りあげていたこと、古家、古材をめぐる建築活動が新築のみにとどまらず、古材の利用が、修繕、増改築、建替というあらゆる局面に現れることを明らかにした。これは、古家、古材を廃棄せずに保管しておく慣行のあったことを意味する。

資料編では、岐阜県立歴史資料館所蔵の「高山陣屋文書」所収の「飛騨国普請願」に収められた 112 点の絵図を整理、収集して、書起し図を掲載した。本論の理解の補助となる。

本論文は、従来の建築史が、新たに建物を造るという時点に注意を集中して、この時の様々な事情を説明する、という特性を持っていることに対し、建設後の長い時間における建築の維持、修理に着目し、その維持活動の実態を実証的に説明した点において、最も新しい研究分野を切り拓いたということが出来よう。さらに、材料に注目するならば、新築の時の材木は、建築の解体時に、そのまま捨てられるのではなく、次の新築に転用され、さらにこれが繰り返されてゆくという経過を経る、という材料の流れのプロセスを解明した点においても、大きな成果があったと言える。また、いままで比較的注目されていなかった、維持、改造に触れる文書群、家政学的研究の素材とみなされていた旧家の日記などを、建築史資料として積極的に位置づけなおした点においても高く評価することができる。

よって、本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。